

内野雅文写真展 「とどまらぬ長き旅の…」に寄せて

石井 仁志（20 世紀メディア評論、内野雅文写真展企画プロデューサー）

新潟出身の写真家、牛腸茂雄の展覧会が東京のMEMという写真ギャラリーで開催されている。牛腸が逝って 30 年がたった。こどもを撮った作品などの名作を見て廻り、『deja-vu』第 8 号での邂逅を思い出した。わたくしは、ページを繰りながら凍りついたのだ。写真はずっと見続けてきたが、あのとき受けた感覚は特別だった。彼の視座の独特な緊張感に飲み込まれた一瞬だ。以後、牛腸作品は重要な位置を、わたくしの感性上に占めている。あの一瞬を思わせる感動（緊張）を味わった写真作家がもうひとりいる。内野雅文である。牛腸は敗戦後の日本が復興し膨張する狭間を写し撮った。内野はその後の衰退（バブル崩壊）と（奇妙な）安定を路上スナップですくい撮った。その視座、感性、写真作品は対極ともいえる様相を含んでいるが、わたくしの内で奇妙な融合を繰り返すのだ。

清里フォトアートミュージアムの収蔵庫手前の一室の机の上に、永久保存作品として並べられた「ケータイ」というシリーズ作品、内野作品との驚きの邂逅である。当時の社会現象としてあまりにもありふれた景色であった携帯電話を、作品化した写真家はいなかった。そのカラー作品、スナップショットの内側に、ほのかなユーモアやペースを嗅ぎ取った一瞬だ。後に、この作家と強く結ばれる縁のことなど、この時は知るよしもない。写真作品は記録性という観点からも作家の置かれた時代から、ある種の束縛を受ける。しかし優れた作品であればあるほど、その記録の内側にその作品に連なる過去、未来を遠望し見えざるものまでを鑑賞者に想起させる力を持っている。よってその作品は写真の中のどんなジャンルの作品であろうが、決して古びることなくわれわれの胸を打つ。

内野雅文は、ほぼ写真三昧の生活の中で自己完結した。大晦日の京都、八坂神社を撮影中に心筋梗塞を起こして旅立った。2008 年 1 月 1 日。その後、彼はわたくしの心中で留まらぬ長き旅をつづけている。成長しているのだ。これからの内野雅文を育てるのは鑑賞者だ。わたくしは喜んで内野雅文写真展を創り続ける。遺作となった京都を白黒で撮影した作品群を

はじめ、初期のシリーズから彼の優しい目は、常に透徹した視座のもと、路上を掴み続けた。34 歳で逝った男に完成はないが、すぐれた未完は観る者を育てる。牛腸が 36 歳、別に夭逝の二人を並べたわけではない。わたくしを揺さ振り続ける写真作家二人を心に刻み付ける行為を繰り返すのみなのだ。そこにはおのずと見続けるという行為が必要だ。こうした優れた写真作家達のアーカイブスを夢見る。見続けるという行為に夢は革新的に機能する。それは多様な写真文化の中に歴史的に組み込まれ、普遍的な眩きを発し続けるのだ。整備の途上だが視覚映像の宝庫ともいえる地域映像アーカイブとの連携、統合も視野に入ってくるだろう。アーカイブス同士のデジタル的結びつきは、新しい過去を見出す。

内野雅文写真展「とどまらぬ長き旅の…」はそういった流れの中に提示する現実、強烈な存在感と事実である。東京では牛腸作品が、ここ新潟では内野雅文作品と時空をそして場所という座標をも自由に、振り子のように行き来しながら表現の幅を拡張してゆく。重要な事は紙焼きされた白黒作品、カラー作品の見事な質感と、デジタル化された作家作品は、あくまでも並存すべきであるということだ。例えばデジタル作品のみが生き残ってゆくのであれば、文化の質は表層のみの薄っぺらなものになってしまうに違いない。人間の五感を完璧にデジタル化することは不可能に近い。そして表現された実在するモノとしての作品は、決して無価値になる事はないのである。



砂丘館企画展 内野雅文写真展 ——とどまらぬ長き旅の…
2013年11月19日(火)～12月15日(日) 砂丘館

